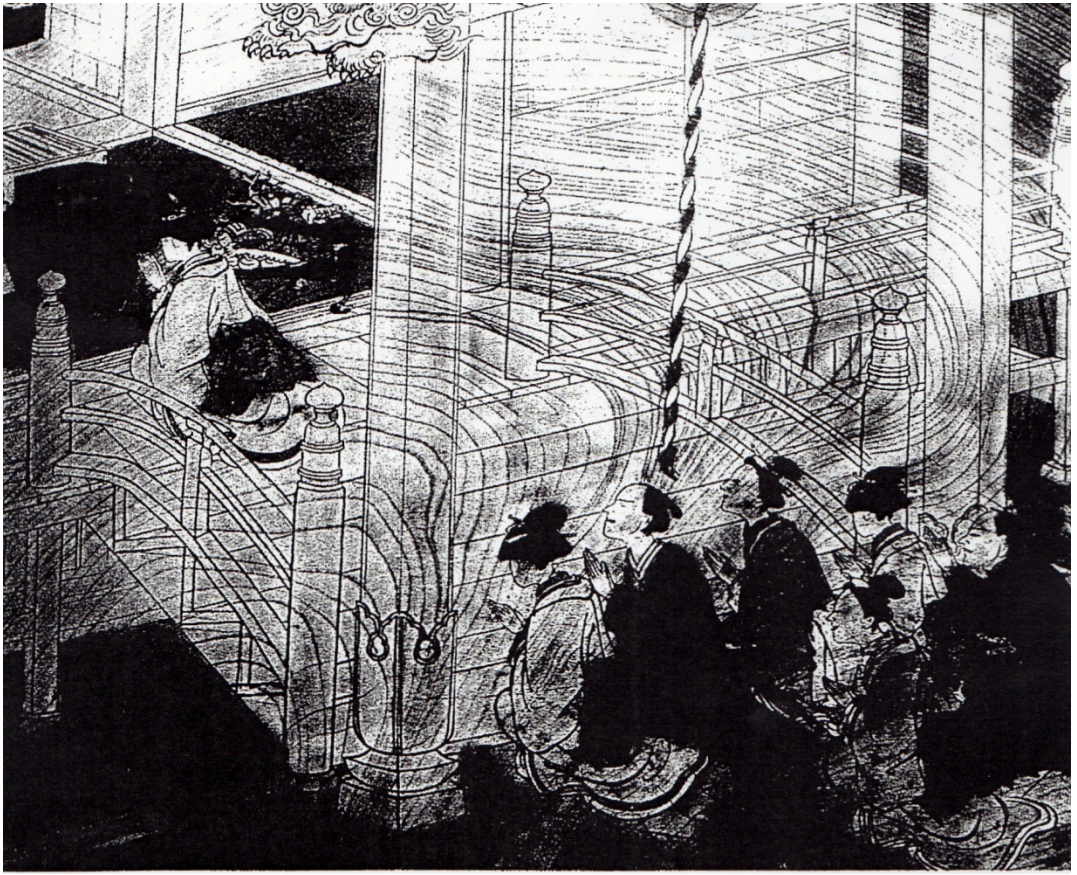




千人同心奉納絵馬（高宰神社所蔵）

千人同心

武田氏滅亡後、浪人となった武士達が、徳川幕府により召し抱えられ同心組の基礎を築いた。

その後、半士半農の人達が近郷からも加わり、千人を越える人数に膨れていった。当初は江戸城の警護、取分け日光東照宮の警護を一手に引き受け、万全を期していた。・・・が、

幕末近くになると、ロシアが北海道攻めを始める。その警護のため、同心も命を受けた。冬は酷寒の地と化し、食料もなく飢えと寒さで大勢の同志が命を落した。特に苦小牧には、その悲話が今も伝わっている。

幕府崩壊後、無血で東照宮を明け渡した責めを負い、老軀の父に介錯させた哀れな事実も残る。片道切符と負け戦を恥じ、故郷八王子の地を踏めずに西国に骨を埋めた人もいる。幕府と維新という大きな坩堝に翻弄された一握りの武士の集団ではなかったのだろうか。

◇散歩のみどころ

今回の散歩はJR西八王子駅南口の散田町から東浅川町の京王線狭間駅まで約5kmの行程である。

西へ暫く歩くと子育地藏尊に逢える。そこから御嶽神社、山王神社、黒木開戸緑地を経て更に西へ行くと真覚寺に出る。境内には蛙が産卵する心字池や芭蕉の碑、奪衣婆の石像などがあり、見どころの一つである。

近くには高宰神社がある。千人同心が北海道警備や開拓、日光東照宮の警備等に派遣された折の安否を祈る神社として建てられたものである。また、心字池を見下ろす小高い丘には万葉の歌碑がある。防人として九州へ旅立つ夫を見送った時に妻が歌ったものである。この周辺は見どころが多い。

さらに西へ行くと十二社へ。一万本の蠟燭が灯る秋の大祭は必見だ。最後の興福寺へ。千人同心の墓もあり、春の枝垂れ桜は見事である。

①下散田子育地藏菩薩

散田町三丁目二七

武州多摩郡散田村以来、ここに大小六体の地藏菩薩が鎮座している。この地藏尊は下散田の子宝子育地藏とも呼ばれ、永年里の人に親しまれ信仰されている。

一番大きい地藏尊は宝永元年（一七〇四）四月吉日と刻まれており、三百年以上前に、下散田の念仏講によつて建立されたという。念仏講は、それ以前からあったと伝えられる。

立ち地藏菩薩は文政年間（一八一八〜三〇）山崎傳次郎が男子出産を祈願し、屋敷内に安置していたものを、今から百六十年以上前に、現在地近くに納めたという。又、石川善吉の屋敷にあった坐地藏も納め、安置したという。

また、もう一つの信仰として、妊娠している女性の家では地藏菩薩に供えられていた蠟燭を持ち帰り、陣痛が始まると火を灯し安産を祈願した。



子育地藏

蠟燭が燃え尽きる頃には、ご利益により出産も無事に終わるといふ。子宝に恵まれない家族には、特に信仰されたという。戦前は毎月四日が縁日で、各家庭が廻り番となり念仏講を開いていた。今は、八月四日が縁日となっている。



子育て地藏

②御嶽神社

●下散田御嶽講

御嶽信仰は三多摩地方を中心に、根強く定着している信仰である。

御嶽神社は盗難、火災除けの神様として知られ、当社のお札を家屋の入口に貼ることで、災いから免れられるとされている。

ここ散田地区にも古くから御嶽講があり、今も下散田御嶽講は受け継がれている。その起源は定かではないが、江戸時代にさかのぼるといふ。御嶽神社と各地域の講の結びつきは深いものがあり、宮司が定期的にそれぞれの講を訪れていたという。

散田地区に於いても、昭和三十年代の中頃までは、そのならわしが続いていた。

中散田御嶽講には、代々片柳を名乗る宮司が、新年になると訪れ、講元宅に宿泊し、講中の一軒一軒をまわりお札を配っていたが、世の移り

かわりと共にそのならわしも消えてしまった。

今では、毎年暮れになると、講の世話人が各家をまわり、お札代を集め郵便で送り、それを受けて御嶽神社は、お札をまとめて宅急便で送ってくるという。

散田三丁目の小高いところに建っている御嶽様は分社で、例祭は四月二日に行われる。例祭を控えた彼岸から月末にかけて、例年数人の者が講を代表して御嶽詣(代参)をする。

その際には「ごけんぞく」というお札(各分社が所蔵)を持参し、新しいお札に替えてもらう(それを例祭に供え一年の無事を祈願する)という役を負っている。代参に詣でた一行は、宮司宅で宿泊とご馳走のもてなしを受けるしきたりになっており、その御札という形で心づけを納めるといふ。このようなしきたりを「坊入り」と呼ぶ。最近では、交通の便もよくなっていることなどから宿泊をする者は、少なくなったという。

しかし、今も「坊入り」は、例祭前の大事な行事として受け継がれている。

下散田御嶽講は、現在二十七軒で構成されている。三丁目にある御嶽様の維持管理は、講の人達を中心に進められ現在に至っているが、時代の流れとともにここを訪れる人の数も少なくなっているという。

毎年元旦には、講中の者が揃って神社に参集し、新年のお祈りをし、お神酒をくみ交わすという。

御嶽講が今も続いていることを知る人は、ごく少数になってしまった。



御嶽神社



大口真神御符



御嶽神社の祠

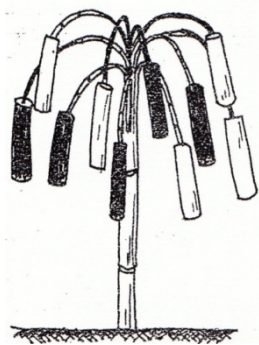


御嶽様のお札

●野入れ

一月十一日、農家の仕事始めの行事で、地域によつては「鋤入れ」ともいわれる。図に示すような「あーぼーへーぼー」と呼ぶ飾りを作り、これを畑に立て豊作を祈願する。

「あーぼーへーぼー」と呼ばれるこの飾りは、割った竹の先にヌルデの木（この辺りではカツンボという）を差し、実った粟と稗の穂をあらわしている。そのために粟穂稗穂が訛つて「あーぼーへーぼー」になったのだといわれている。畑作地帯だった散田小学校周辺では、三十年くらい前までは、どこの農家でもこの行事を行っていたという。



「あーぼーへーぼー」
以前は散田小学校に実物があつた

③山王神社

散田三丁目

山王、日吉、日枝の名が付く大小の神社は全国に分布している。

山王の起こりは、滋賀県大津坂本の日吉（ひえ）神社の別称で、最澄が大和国三室山（みむろやま）の大輪神（おおみわのかみ）すなわち大物主神（おおものぬしのかみ）を勧請し、中国の天台山国清寺の山王祠にならつて神号を山王と奉り、比叡山の守護神としたのに始まる。



山王神社

④黒木開戸緑地

天氣の良い日は子供たちの歓声が聞こえ、朝夕は犬と散歩する人たちが賑わう。里山を保存するため、八王子市が買収した散田町四丁目にある緑地帯である。

この貴重な自然が残ったのは、地主の理解と周辺住民の熱意が実を結び、平成三年度から十八年度に掛けて市が取得したものであり、広さは約一・四haである。

現在は周囲の崖が崩れないよう保護し、環境保全に力を入れている。管理は市の公園課が担当している。自然が残る里山は、春には桜やこぶしの花が咲き、鶯の声がこだまし、夏はさわやかな風が森の木々を震わせ、蟬の声も涼しい音に聞こえて来る。

四季折々の風情の残るこの緑地は、散田町の原風景を思い起こさせてくれる土地でもある。



貴重な古道として残る黒木開戸緑地



大室権現

●大室権現社

真覚寺のすぐ東方めじる台に行く坂道の左側に小さなお宮がある。御室社とも、高宰様の奥方ともいわれている。「新編武蔵風土記稿」に、「除地九尺に三間許り村内真覚寺の東方半町ばかりあり社は北に向いて神体とせるものなし村人によれば真覚寺境内に高宰社ありこの神の配偶なりという」



お稲荷様 左と右



大室権現お稲荷さま

⑤常光山観音院真覚寺

散田町五・三六・一〇

宗派 真言宗智山派

本尊 不動明王坐像

こんから童子・せいたか童子

寺宝 奈良前期の銅造薬師如来倚像、

白鳳時代伝来（市有形文化財）

（現在八王子市資料館寄託中）

開山 隆源僧正

開創 文暦元年（一二三四）

多摩八十八ヶ所第七十一番札所

応永十八年（一四一一）相模国津久井城主長山修理亮忠好公の招請により、京都醍醐報恩院より大僧正隆源和上が中興開山となり、観音堂を創建し、別当寺として真覚寺を起す。現在の本堂は唐様式。

●蛙合戦

境内の心字池は、古くから多くのヒキガエルが集まる所で有名である。「五街道細見」にも記されている。

昭和三十七年二月、蛙の生息地として市の天然記念物に指定された。

ヒキガエルは、池の中で一生を過ごす蛙ではない。産卵期を除くと藪や雑木林の土の中で生息する夜行性両棲類である。

春の彼岸の頃に、一度の産卵期を迎えた蛙は、雨の夜、一斉に水温む池に集まる。産卵に集まる蛙の様子、布陣を敷くように見えることから、「合戦」と呼ばれるようになったという。

江戸時代から親しまれてきたこの池も、今では周囲の開発もあって、数匹のみとか。この池に再び蛙が集まってくる時代が来るのだろうか。

池を見下ろす小高いところに、延享二年（一七四五）四月建立の芭蕉翁の蛙塚がある。

戦後では食糧不足だったため、蛙を捕ってきて、煮たり焼いたりしてよく食べたものだ。



芭蕉翁の蛙塚



真覚寺



●金銅造薬師如来倚像

白鳳時代の作。空海帰朝のおり、大同元年（八〇六）唐からもたらされたもの。そして、その手法が朝鮮仏に似ているところから新羅請来のものともいわれている。



●梵鐘

鐘楼に記されている。加藤鋳物師、加藤吉重の万治三年（一六六〇）の作で、施主は、千人同心志村又左衛門らの、庚申講中によるものとされている。



梵 鐘

開山の隆源僧正は、京都醍醐報恩院第十世大僧正となった高僧であった。現在、寺には隆源僧正の右手と伝えられるミイラが保存されている。二世真覚上人は、寺の発展に尽力し、寺の名前がその法号になったといわれている。

天正十九年（一五九一）徳川家康から寺領五石の朱印状を寄せられている。



隆源僧正の右手と伝えるミイラ
真覚寺所蔵



鐘 楼

●千人同心二宮心齋翁の碑

観音堂の左手に建つ。二宮光鄰（？～一八七六）の碑で心齋は号。幕末に千人同心の名簿ともいえる「番組合之縮図」を著した人。明治になって「千人町」の名称を残すことにも尽力した。



二宮心齋翁の碑



文字の一部拡大



貴重な石仏群



観世音菩薩のお堂

●奪衣婆（閻魔大王の妹） だっえ ば

お盆にお寺へ行くと、大きな地獄絵図の掛け軸が本堂に掛けてあった。良く見ると、赤鬼青鬼がいて、そばに閻魔大王が鎮座している、誠に怖ろしい絵である。死出の旅、足に草履、そして首からは三文銭を入れた頭陀袋を下げて、三途の川岸で、奪衣婆が死者の衣服をはぎとり、樹上の懸衣翁に渡す。

この時は、どんなに偉い学者でも大臣でも、みんなはぎとられ裸にされてしまう。それこそ、生まれる時も死んで行く時も裸だ。でも三文銭だけは、三途の川を渡る時の料金（片道）だから取られることはない。

どんなにお金があっても、地位があっても、此処からは皆平等である。そして閻魔様の前に出て、生前良い事をしたか、悪い事をしたかを裁かれる。嘘をつく舌を抜かれ、火の山、針の道、血の池へ行かなければならない。

良い事をした人は安住の地へ。
これは、私達が悪い事をしないように戒めのために、書かれた地獄
絵図なのだろう。



十王信仰による石仏・左が奪衣婆（真覚寺）

たかさい

⑥ 高宰神社

多摩の横山の西に位置する高宰神社は、我が国南北朝の終り頃、京より高貴な御方が故あつて氏名をかくし（南朝の公卿）、現在の台町、御所水の地に居住したことから始まる。薨去後、由木の杉山峠に埋葬され、その後、山田村広園寺境内の一角に祠を建立し、小蔵主明神と号し、鎮祭したのが社の起源といわれ、いまから約六百年以前にさかのぼる。その後、何故か散田の古明神という処に移り（現、めじろ台四丁目）さらに正保慶安（一六四四〜五二）の頃、真覚寺境内に移し、高宰神社と命名し現在に至ったというもの。この神社は、靈験あらたかで、千人同心武門の神として深く崇敬され、千人町、散田町、並木町、山田町、めじろ台などの鎮守神でもある。御本尊は、按察使（あぜち）大納言藤原信房卿ともいわれ、一説には

高倉宰相某ともいい、また明治元年の神仏分離令により明細帳作成当時には、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）と記されているが、詳細は定かでない。現在では、按察使大納言藤原信房卿の説が有力である。従って神社登録簿には「高宰の神」となっている。因みに、高宰とは、高貴な方の高、宰は、宰相といわれた、大臣クラスのことと思われる。尊貴両者を取り入れ、高宰神社の社ができたと思われる。高宰の神が在世中の地を、御所水の地といい、清水の湧き出る処から「御所水の神」といわれたのは、当時朝廷以外には御所の名は使用されなかったことからよほど高貴な方と推察できる



入口の手水



貴重な祠群



高宰神社

● 高宰神社の田の神
真覚寺の南側にある高宰神社に、田の神が鎮座している。伝えによると昭和六十一年に、近くの人が近所で見つけたという。
こうした田の神の石仏は、九州地方南部に見られる。
ここの田の神は、頭に穀物を蒸すコシキのシキ（簀の子）をかぶっており、その姿が愛らしい。



高宰神社 奥宮



左が庚申塔 右奥が田の神



田の神

⑦万葉の歌碑

真覚寺境内の、心字池が見下ろせる小高い丘の上に、万葉歌碑がある。

赤駒（あかごま）を

山野（やまぬ）に放（はか）し

取（と）りかにて
多摩の横山かしゆかやらむ

と刻まれている。今から千二百五十年前の天平勝宝七年（七五五）に作られた「万葉集」巻二十にある。

歌の作者は、豊島郡（今の豊島区）（としまこおりかみちようくちはし）のあらむしがつまうちべのくろめ）なり。

歌の意味は、赤毛の馬を山野に放してしまい、捕える事ができない。旅に発つ夫を、とうとう、歩いて行かせなければならなくなった。こんなに急に出発させられるのでなければ、馬を捕まえておくことが出来た

だろうに。

あのうねうねと続く多摩の横山を、歩いて越えて行かなければならない夫は、さぞ辛いことだろう。

夫Ⅱ防人（さきもり） 牧Ⅱ駒木野（裏高尾）大巻（牧、柵田）

屯倉（みやけ）Ⅱ天皇直轄地

大牧Ⅱ由比牧（由井）小川牧（秋留（あきる））石川牧（石川町）立野（？）朝鮮半島Ⅱ新羅、高句麗、百済三国の争い。

防人の歌

から衣 すそに取りつき

置きてぞ来ぬや 泣く子らを

母（おも）なしにして

国造小縣郡他田部舍人大島（おさたべのとねりおおしま）

ここで疑問Ⅱこの歌碑を建てたのは、横山村が、八王子市に合併する際、横山名を偲び有志が建立したと聞く。

牧は、八王子以外にも多摩地域には多々ある今の豊島区辺りから八王子まで追いかけてきたのか。府中市などでも、横山のこの歌碑を「万葉ウォーク」として、町おこしに利用している。

若妻はどの辺りでこの歌を作ったのだろうか。この東（あずま）の地から遠い九州の果てまで、死も覚悟しなければならぬ使命。生活、教育、それに交通機関の乏しかった奈良時代に、身分も低い防人の妻が、万葉集に載るような、歌をよんだことに深い感銘を覚える。

●防人の歌

防人に関係する万葉歌は「赤駒」の歌だけではない。当時東国から西国へ派遣される防人が、この横山地方を過ぎて行ったと思われる。防人が歌ったものを幾つかあげる。
また当時の牧畜が、放牧であったことなども知ることができる。

万葉集 卷第二十 四四〇七

ひなくもり 碓氷の坂を

越えしだに
妹が恋しく忘らえぬかも

まだようやく碓氷峠を越えたばかりなのに、もうこんなに妻が恋しくて忘れられぬ。

他田部子磐前

(おさたべのこいわさき)

卷第二十 四三二七

我が妻も 晝にかきとらむ

暇(いづま)もが
旅行く我は見つつ俣はむ

自分の妻の姿を晝にかいて持つて行く、その描く暇が欲しいものだ。遙々と辺土の防備に行く自分は、その似顔絵を見ながら思い出したい。

長下郡物部古麻呂の作

(もののべのこまろ)

卷第二十 四三五七

蘆垣の隈処に立ちて 我妹子が

袖もしほほに
泣きしぞ思(も)はゆ

出立のまぎわに、蘆の垣根の処で、袖もしほしほと濡れるまで、泣いていた妻のことが思い出されてならない。
上総市原郡上丁刑部直千国
(おさかべのあたひちくに)



⑧万葉公園

散田町

昭和四十六年(一九七一年)十二月開園。京王帝都電鉄が開発したためじろ台団地がほぼ完成した数年後にできた公園である。

散田町五丁目にある近隣公園で、

面積は二二・八九九ha、万葉植物公園とも呼ばれている。親子連れや子供達のいこいの場所となっている。

公園の北側には「万葉赤駒の碑」が昭和二十九年(一九五四)ふだん記運動創始者橋本義夫氏により建立。

阿加胡麻乎 夜麻努爾波賀志
刀里加爾旦 多麻乃余許夜麻
加志由加也良牟

むちはしべのあらむし

棕椅部 荒虫 夫婦は豊島郡今の板橋辺であろうか。荒虫は上丁(かみつよほろ)という役で、九州の辺境防備の防人として兵役に服していた。

丁(よほろ)とは、もと脚のひかがみの意味で脚力を要することから古代の課役を負担した成年男子のことをいい、朝廷の土木工事に使役された者と呼んだ。

「戸令」によると男二十一為丁、六十一為とあり、丁には役丁、荷丁、単丁、

丁匠、運丁、仕丁等の種別があった。



忠魂碑



万葉赤駒の碑

●三田地蔵

この石地藏は、いつの頃からかの地に鎮座され、彫字も消えているため年代は不明である。

縁日は毎月二十四日で、昔は十月二十四日夕刻、お地藏様の横に笹を敷き、年寄りが集まり、鉦を叩き、ご詠歌や村念仏を唱えた。

古より三田の入口に鎮座し、村人の安全を見守り続けているお地藏様である。



三田地蔵

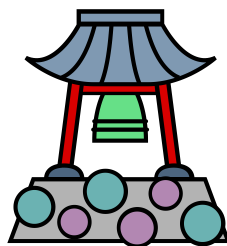
⑨十二社

東浅川町

祭神 天神七代・地神五代
創建 慶安二年（一六四九）九月十

九日代官設楽源右衛門及権兵衛による

明治三年三月十九日、十二社大権現の社名を十二社に改称。明治二十九年社殿改築。昭和二十年八月二日八王子空襲戦火のため社殿消失する。現社殿は、もと東京幼年学校（長房町）内に奉斎せる雄建神社の社殿を奉遷鎮座。昭和三十八年十月六日社殿拝殿新築。昭和五十四年拝殿北側山林を造成、境内広場を造る。平成元年社殿拝殿及石段の改修。
境内社として稻荷社、日吉山大権現、牛頭天王社、高宰神社が祀られている。



●天神七代

- 一. 国常立尊（くにとこたちのみこと）
- 二. 国狭槌尊（くにのさつおのみこと）
- 三. 豊斟淳尊（とよくむねのみこと）
- 四. 泥土煮尊（うひおにのみこと）
- 五. 大戸之道尊（おおとのじのみこと）
- 六. 大笈辺尊（おおとまべのみこと）
- 七. 面足尊（おもたるのみこと）
- 八. 惶根尊（かしこねのみこと）
- 九. 伊弉冉（諾）尊（いざなぎのみこと）
- 十. 伊弉册尊（いざなみのみこと）

●地神五代

- 一. 天照大神（あまてらすおおかみ）
- 二. 正哉吾勝速日天忍穗耳尊（まさやあかつはやびあめのおしはみみのみこと）
- 三. 天津彦彦火瓊瓊杵尊（あまつひこひこほににぎみのみこと）
- 四. 彦火火出見尊（ひこほでみのみこと）

五. 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊（ひこなぎたけうがやふきあえずのみこと）

天神七代とは、日本神話で、地神五代の前に、我国を治めたといわれる天つ神七代の総称。地神五代くにつかみは、人皇一代神武天神に先立つ神々である。

十二社・応和三年（九六三）七月、一説には応安年間（一三六八〜七五）の制で、祈雨の神社。竜穴、水主（みぬし）木嶋（このしま）乙訓（おとくに）平岡、恩智、広田、生田、長田、坐摩（いかすり）垂水、火雷。灯明（燈明）祭り・ろうそく祭りと。五月、百段近い石段の両側に約四千本のろうそくを立て、火が一斉にともされる。幻想的な雰囲気だ。無病息災を願ってか、祭りに訪れる老若男女が毎年増えているとか。関東十八代官設楽源右衛門の屋敷跡ではないかといわれている。



十二社

●入口の石仏と碑

十二社の階段を登る右側に石仏が鎮座している。右から馬頭観音、石仏、庚申供養塔である。

昔、馬は家族同様に飼育され、農耕や運搬に飼い主と共に、汗を流し働いていた。馬が死ぬと馬頭観音を建て供養した。馬頭観音の彫字には、大正三年五月建立當村小山時太とある。

石仏は傷みが多く、元はこの下三叉路の土橋を渡り右側のところの座石の上に横になっていた。いつの頃造り祀られたか不明。古い地藏尊である。

庚申供養塔は元禄十年四月十一日とある。庚申信仰は古くから行われ、江戸時代中期が一番盛んになった。

十二社碑は平成元年、社の石段と社殿改築に多大な奉納の、この十二社碑を建奉の納主、笹野佳宏、松本全博両氏による。



石仏と碑

●高宰神社の碑

その昔、十二社登り口辺りが崩れ、そこから数基の板碑が出土、その一つが石段横に立っていた。

高さ五〇cm程度の板碑である。

昭和二十年八月二日の八王子大空襲で焼夷弾の直撃を受け、祠と共に破壊された。平成元年新たに高宰神社の碑を建て遷宮された。



十二社神社



高宰神社の碑

●御神木

根の周りも幹も三百五十年以上の風格と貫録を持つ椎檜、神々しく生い茂る椎木である。

ブナ科の常緑高木でツブラジイ（コジイ）と、その変種スタジイ（イタジイ）がある。うっそうとした大木になる。



御神木



スタジイの実

●牛頭天王社

ごず

祠の右側に元治元年（一八六四）

とある。この神は医の神で流行病等を恐れ、昔は各地に祀られていた。

明治維新の寺社分離により、神が仏とされ社名を変更したりしたが、廃社とされた。

村の人々は、日吉山大権現社と共に隠れ社となし、現在に至っている。

●日吉山大権現社

石祠を造建されたことが彫字されている。

「當社造立者慶安年中當村興福寺大檀郡三河国設楽村設楽右エ門能政両家為武運長久並氏子」

左側面繁昌祈者代世文化三寅卯月七日奉過宮興福寺十二世自宣代とある。石祠の両破風に設楽家の菊花の家紋もあり十二社を創建された代官を称え祀られた。権現の神使である三猿が彫られた台座は見事である。



牛頭天王・日吉山大権現



稻荷大明神

● 正一位稲荷社

「新編武蔵風土記稿」によると十二社権現社の項に赤社山王稲荷両社相殿とあり、お稲荷様も古くから祀られていた社である。祭りは二月初午の日、氏子だけで開催される。



稲荷大明神



(鳥居の内側から)



十二社祭礼



宵宮では一万本の蠟燭が点る



十二社内宮

⑩ 聚林山千光院興福寺

東浅川町七五四

宗派 曹洞宗

本尊 聖観世音菩薩

開山 龍鳳寺神奈川県愛甲郡小野村、

第四世香山充孫大和尚

開基 雨宮秀徳、関東十八代官雨宮

勘兵衛の祖先と伝える

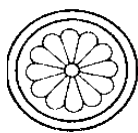
第三世昭庵の時、寺領七石の朱印

を与えられる。

境内には、古くから聚林山稲荷大明神が祭られている。

山門は、関東十八代官の一人であった設楽家の屋敷門を移築したもので、「横木の門」といわれている。

桑都三十三観音札所、第二十三番として「興福寺七観音のみ法（のり）にて苦脱ぎ絶つとる、子細てんじん」と詠われている。



山門・本堂

● 山門「横木の門」

延宝年間（一六七三〜八一）の代官、設楽源右衛門の屋敷がこの寺の東方にあったといわれる。元禄の頃、子孫が江戸に移ったためこの門を寺に移築したという。

柱は、樟（くす）の大木を用いた立派な門で、瓦も菊の御紋入りが使用されていたという。

春にはしだれ桜がみごとであり、花を愛でる人で賑わう。

● 結界石

不許葷酒入山門。此碑並石段建立主千人町、丸屋彭盈軒。維岩文化三丙寅稔七月吉日聚林山興福寺現住自事である。



不許葷酒入山門



聚林山 興福寺

●興福寺七地藏

聖観音地藏を中心に六地藏が並ぶ、珍しい地藏尊である。納められた施主の氏名と戒名が刻字されている。



七 地 蔵

●念仏供養塔

「毎日晨朝入諸定入諸地獄令離苦無
仏世界度衆生今世能引導、梶田郷當
村施主 嶋村新左エ門、嶋村安太郎、
三田川吉蔵、橋本要右エ門、小山當
蔵、興福寺十七世発道代文化五年辰
三月」とある。



念仏供養塔

●舟型地藏

「為参窻理学大姉苙日提世千時萬治
三戾子年四月施主敬白」とあり、ま
た奥の墓地にも同じ地藏がある。
年代は古く、慶安三年（一六五〇）
の記録があり、市内でも十指に入る
古仏である



舟形地藏

● 稲荷大明神

門を入ってすぐ左に、聚林山稲荷大明神が祭られている。今から二百数十年前、第十世説外普宣大和尚により建立。祠には自然石の御神体を祭る。

稲荷信仰は、霊験あらたかな信仰神として、今なお多くの人たちから慕われている。



稲荷大明神



子宝祈願塔



弁天堂



弁財天



● 弁財天

池の中島に鎮座する祠は弘法大師作といわれている

●千人同心の墓所

八王子千人同心頭の河野、中村両家の墓がある。

明治維新後、無縁墓地のように荒廃していたという。

昭和四十九年春の彼岸に、有志らが集まり、住職雨宮義匡師により、慰霊の法要を行い、両家墓所の修復も行う。

今でも墓所は、綺麗に清掃されている。

一説には、同心頭の窪田小兵衛親子も葬られているとか。



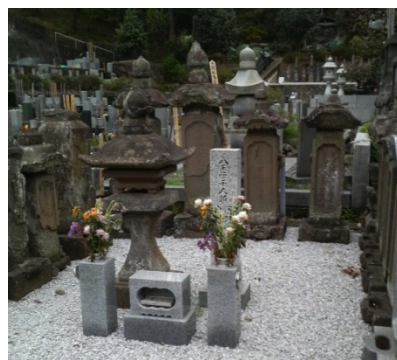
千人同心の墓所

●設楽家の宝篋印塔

本堂左り西奥の墓所に、設楽家所縁（ゆかり）の宝篋印塔がずらりと並ぶ。古へ想を馳せる。



移設前の宝篋印



千人同心組頭
河野家・中村家累代の墓所

●七観音

本堂南側の部屋に設楽代官が納めたとある寄木造りの七体の観音様が、金箔の経背を背負い厨子に納まっている。



現在の宝篋印

◎参考資料

- ・新編武蔵風土記稿
- ・武蔵名勝図絵
- ・八王子市史
- ・八王子事典
- ・八王子寺院めぐり
- ・高幸神社由来記等
- ・三田文化財案内絵図
- ・常光山真覚寺資料
- ・十二社パンフ
- ・興福寺の志おり
- ・瀬沼和重資料
- ・万葉集大成巻十四平凡社
- ・八王子市郷土資料館資料
- ・昭文社
- ・八王子市地図
- ・八王子市観光マップ
- ・インターネットページ

メモ